

浄土

十一月号



法然上人鑽仰会

昭和十年五月廿日
昭和二十四年四月二十八日
昭和四十四年十月二十五日
三權郵便物認可
（毎月一回一日発行）
（特別徴収票第三五二号）
印刷 昭和四十四年十一月一日 発行

第三十四卷

第十一号



秋 情 仏 心

池塘春草の夢は、早くも楷前の梧葉すでに秋声となる。うたた匆忙の世では、我や先き、人や先き、今日とも知れず、明日をも計られぬ、かげろうのような露命ではあるが、同時にまた、いつまでも長らえるかもしれぬ生命でもあらう。いついかなる場所で死んでもよいという覚悟は大切であるが、また、いつまでも生きぬくという用意も肝要なのである。

死ぬる覚悟、生きうる用意、この二に無くてならぬものは、念仏の二字である。

深まりゆく秋の夜半、ひそかに夢さめてひとり念仏をとなえるならば、おのずから仏心のささやきが聞えるであらう。

秋風にあうて真如を念ぜざるは、信心のうときなり

むかし旅人は幾たびか月に泣き、秋風に心を乱した。仏性は天地の風物に宿りたもう。草木に仏相を覩じ、風雨に説法を聞く、これみな如来抱喚のすがたである。

いま月は冴え、気は澄み、風は渡る。秋ふけゆくとともに、悟りの道を進み、ひたすら世の安穩を祈りたい。

— 目 次 —

表紙「紅葉」松濤達文画

北海道に旅して……………岸 信宏…(2)

明治仏教をになった人々

——浄土宗学人のかがやかしき足跡——…(6)

現代生活と宗教② ただ一人の学生

……………土屋 光道…(9)

維新のころの人たち⑤……………大橋 俊雄…(12)

ご法語をいただく……………(15)

新作壁画紹介 天女の舞……………(16)

あたたかくひろく……………合田 徹雪…(18)

俳人 一茶の生涯③……………大和 琴二…(20)

涙……………酒井 達雄…(24)

読者の声 法然上人の念仏に有縁の喜び…………(26)

現代宗教論②……………竹中 信常…(28)

編集後記……………(32)

念仏を修せんものは、余行をそしるべからず。そしらばすなわち
弥陀の悲願にそむくべきがゆへなり。

法 然 土 人 御 法 語



北海道に旅して



岸 信 宏

本年は明治維新から、ちょうど一百年に相当しますので、我が国においてはいろいろの方面において、いろいろの行事が行われています。明治維新といえ、我が国の仏教徒に取っては廃仏毀釈の苦難の時代でありました。

神仏習合の長い伝統の中から、一朝にして神仏分離の政令のもとに、神社と仏閣とが分離せられ、多くは神社が独立して保護せられ、仏閣は破壊せられ、仏像経巻は焼かれ、僧侶は還俗し、末法、法滅の苦難をなめた時代でありました。その中であって、護法の精神にもえた幾多の先賢、大徳によって仏法興隆の道がひらかれたのであります。

政治の方面においても廃藩置県によって、士農工商の封建制度の上層階級に位して居った士族の人々が、一朝

にして職を失い、新しい職を求め、新しい生活を切り開いたのでありますが、多くは転落の一途をたどったのであります。

我が国の北辺であつた蝦夷（えぞ）の地も北海道として発足することとなり、その広い天地に多くの人々が、新しい生活の夢を抱いて多くの人々が移住したのであります。政府もまたこの北海道の開拓に力を注いだのであります。明治初年に、政府は北海道開拓者養成の仮教場を我が浄土宗の大本山増上寺に置いたことであります。これが後の北海道農学校の前身であつたのであります。この農学校時代にアメリカからクラーク博士が招かれ、在任期間は短かったようですが、「青年よ大志を抱け」という博士の薫陶のもとに多くの人材が輩出したのは有

名な語り草となつていたのであります。

仏教各宗もまたこの新天地に進出をしたのであります。増上寺は一時北海道内の浜益（はまます）、静内（しずない）、色丹（しこたん）の各地に支配権を有して、大いに開拓事業に従事したことがあったと聞いています。今の葉舞（はほまい）、色丹の地が、今次大戦後ソビエットの占領する所となり、北方領土問題として今尚我が国とソビエットとの間に未解決のままであることを思う時に、まことに感慨の深いものあるを覚えます。今次大戦の終末期にソビエットは北海道全土を占領しようとしたが、アメリカの軍事力によって阻害せられたとも聞いて居ります。若しそうなれば、朝鮮が南北に分かれたれ、ベトナムが南北に分かれたれ、共産と自由と二大陣営の激しい対立の場所となつてゐる現状を思う時、まことは肌寒い感じを覚えざるを得ませぬ。明治百年、北海道に取つても開道一百年、我が国民の関心が北海道に向けられることもまことに故なしとはしないのであります。

北海道庁においては去る九月開道一百年の式典を札幌において、両陛下の行幸を仰いで盛大に行われたのであります。私はその行事を新聞やテレビで拝見しながら最も感慨の深いものを覚えたのは、両陛下は北海道へお出

でになり、式典の前後、札幌に近い支笏（しこつ）湖で一泊をなされ、翌日札幌の式典に臨まれる前に、御道順であつた関係もありましようが、我が浄土宗の新善光寺の経営する市内伏見町にある養老院並にその附属病院を御視察なされたことであります。私も六月二十五日に新善光寺（札幌市南六条西一丁目）で催された開道一百年記念浄土宗大会に法要の導師として参りました際、その前日廿四日に新善光寺住職太田隆賢師に案内せられて、この養老院と附属病院とを見学したのであります。地は札幌市内の西南、藻岩山（もいわさん）の麓の高台にあり、地下一階、地上四階の堂々たる白亜の建築で、近代設備をととのえた道内随一の此の種の施設といふことができます。両陛下も太田住職の御案内と説明のもと、つぶさに施設を御視察になり、老人達にいたわりの言葉をかけられ、予定の時間二十分を超過して、式典場に向われたとのことです。まことに宗門の榮譽と申さなければなりません。

このたびの親教の旅は六月十九日に京都をたち、秋田県に立ちより、能代市の西福寺と、阿仁町の善導寺と、大館市の一心院に立ちより、それぞれ行事を終り、六月二十四日に秋田空港より札幌の市内空港につきました。



札幌にはローカル線が使用する市内空港と、国際線が使用する千歳空港とがあるのです。直ちに市内伏見町の観音寺におもむき、本堂新築落成慶讃の法要を親修しました。前記の新善光寺の経営の養老院と地を接しています。この寺は明治十八年に新善光寺の初代住職大谷玄超師が、市民行楽の藁岩山中に観音菩薩の三十三ヶ所霊場建築にその端を発し、同寺二代林玄松師のお弟子中田松念尼がここに一寺建立の悲願を発し、昭和二十五年に観音寺を創設して初代住職となられたのであります。爾来刻苦励精、本堂は鉄筋をもって外観は南方仏教国のバゴダ風にし、内部は和洋折衷にし、庫裡等の附属建物も完備し、山中の三十三所観音霊像の安置も改修し、ここに市

民の行楽をかねた大霊場の出現を見るに至ったのであります。

廿四日の夜は新善光寺の篤信の檀家である中村屋という旅館にとめてもらいました。翌二十五日午前九時新善光寺におもむきました。鉄筋和風の堂々たる威容を備えた本堂並に庫裡は近代的設備の整った建築であります。北海全道の浄土宗寺院住職約百八十名、檀信徒代表約二千名の参集があり、これを二分して午前と午後とに開拓功労者慰霊法要と剃度式を行いました。明治維新以来百年間、北海の辺土を開拓して今日の盛大を見るに至るまでの故人の労苦を思う時にまことに感謝にたえないものがあります。そうして今日参拝なされた人々に剃度式の作法を行って、午前には七百名、午後には九百名の人々に仏縁を結ぶことができましたことはまことに有りがたいことに思われました。

翌二十六日、開道百年記念浄土宗大会の一環として釧路大会が催されることとなり、特急大空号にのり、釧路にむかいました。同地方浄土宗寺院合同主催にて釧路市米町の大成寺（藤井正亮師）にて行われたのであります。この機会に阿寒湖畔の一步荘前田家を訪ねることのできましたことは私にとって嬉しいことでした。先代故男爵

前田正名翁の記念碑が知恩院の山門の北側に建っています。碑面の絵と文とは富岡鉄斎の雄渾なる筆によるものであります。正名翁と鉄斎画伯とは親交があり、前田家には鉄斎の画幅や筆蹟が多く所蔵せられているのであります。先年その内の三十余幅が前田家から知恩院に寄贈せられたのであります。当主は正名翁の二男正次氏の末亡人光子様で、毎年一回知恩院へ参詣していただけるのであります。東京の自宅を引き払ってこの五月には阿寒湖畔の別宅一步荘へ移居せられたのであります。正名翁は早く欧米視察旅行で、我が国でも製紙業を發達せしむる必要を感じられ、帰朝後、製紙の原料となるパルプ材として、阿寒周辺に繁る広大なる原始林と土地とを入手せられたのであります。しかしやがて阿寒湖、摩周湖一帯の土地が国立公園に指定せられた為に、原始林をむやみに伐ることができなくなったのであります。そこで前田家は自家の山林に従事している人達に阿寒湖の観光事業に従事せしむることとなり、今日の阿寒の町を築き上げられたのであります。前田様は知恩院へ参詣せられる度に、私に対して、北海道へ御出でになる機会があれば必ず一度阿寒を訪ねて下さいと申されるのであります。今回その御芳情に答える機会を得たわけであります。

私は祖山に晋董して間もない昭和二十五年頃に、青森県の藤崎の摂取院に親教をした際に、渡道して小樽の近くの歌乗（うたすつ）の教立寺に巡錫をしたことがあります。それからもう二十年近い歳月が流れました。特急大空号の沿線に見る窓前の光景は、平野部に見る農場と工業の發達である。山間部の沿線に見る北海道特有の熊笹の繁茂は、先年の巡錫の際の印象を新たにしたのであります。

この曠野ひらきし人の辛苦みる開道百年北海の旅
沿道に熊笹しげる汽車の窓北海の旅ふたたびしたり



— 北海道のシンボル時計台 —

明治仏教をになった人びと

その一



——浄土宗学人のかがやかしき足跡——

明治五年四月大政官布告に「今より僧侶の肉食妻帯

蓄髪勝手たるべきこと、但し法要の他は、人民一般の服を着用して苦しからず」として僧侶も苗字を称せしむることとなった。これは廃仏毀釈の厳しくはげしい政策のあらわれで、仏教教団よりの離脱を容易にして、教団組織内部からの崩壊をはかったのである。そればかりではなく、神祇省が廃せられ、教部省が置かれ、三条の教則、十七兼題が定められ、僧侶はみな教導職として、これを講ぜしめられるなど、外部からの圧迫も激しくなった。

神仏合併の大教院が、増上寺におかれたのもこの年であり、本尊阿彌陀如来は裏の徳川台徳院廟に移され、本堂には皇祖大神がまつられて、しめ縄が張られ、僧侶は仏教本来の教義信仰を説くことができず、敬神主

義を宣布せざるを得なかったのである。

このような弾圧のあらしのなかで、浄土宗においては、反抗とともに、自戒反省の気運がおきてきた。その先達は、鵜飼徹定上人と福田行誠上人である。徹定上人は、明治五年、最初の管長となられたのであるが、「仏教不可斥論」を著わして、仏教の軽んずべからざるゆえんを力説するとともに、当時の新しいイデオロギーとして移入されてきたキリスト教に対しても、多くの著書によって対抗したのである。

福田行誠上人は、むしろ教団内部に向かって自戒反省をもとめて、この法滅にも等しい排仏破仏の到来は、僧侶自身の腐敗墮落によるものであるとして、「釈門新規三策」を著わしつぎのように述べている。

「仏家の廃仏を悲しむは、寺塔の破壊を悲しむにあら

ず、衣食の減ずるを悲しむにあらず、官録を失ふを悲しむにあらず。ただ天人にこれ至善の道を失ふを悲しむなり。僧侶の興法を念じ、廢物を防ぐ、ただこれが為なり」と。

一般には、廢仏毀釈のあらしは、数おおくの堂塔伽藍を破壊し、僧侶の地位と権力を剝奪して、衣食生活を困窮せしめるにいたったとしてゐるのである。しかし、行誠上人は、そのような僧侶のなげきに対しては目もくれずに、むしろ、仏道の本来のすがたが失われることを憂い悲しまれて、教団の自覺と奮起を、つよくうながしておられる。

行誠上人は、明治二十一年に入寂されたが、そのあと、日野靈瑞、野上運海の両師によってうけつがれたが、徹底、行誠両上人の正法興隆の熱意をうけて、岸上恢嶺、神谷大周、勤息義城、中島勸秀、大鹿愍成、桑門秀我、黒田真洞、越智専明の諸師が、当時青年僧侶として、各方面に進出しはじめていた。岸上恢嶺師は、「説法惟中策」を著わし、神谷大周師は教育界布教界に縦横の活躍をつづけたのである。勤息、中島、大鹿、桑門、黒田の諸師も、大正の末、昭和の初年まで、一

宗の教學を指導し、次の世代を荷負う學者を養成し、浄土教學興隆の基いとなったのである。

これら巨匠たちの學問は一字一句いやしくもしない訓詁注釈の伝統的な學問であつた。余乗では俱舍、唯識、天台、華嚴などが広く學修され、宗乗はおもに神谷、勤息、桑門、黒田の各師が專攻した。宗乗でも、神谷、黒田両師のように、行誠上人の學風を受けて達意的な傾向もあつたが、多くは細積的であつた。このような學風は、鎖國封建の時代に修されたため当然のことかもしれないが、この學風が、かえつて、新しい方法による仏教研究の必要性を痛感せしめ、それへの情熱をおおる結果となつたのである。

江戸時代には講學は關東十八檀林でおこなわれ、明治になつてからは、興學所（勸學所）が置かれ、十二年には東京に東部教校を、京都に西部教校が設けられて宗侶が養成されたのである。明治二十年に黒田真洞師らの首唱によつて學制が改革されて、浄土宗本校、支校、普通學校と組織化された。

はじめ本校は芝公園に開校され、のち小石川表町に移され、明治三十一年には浄土宗高等學院と改稱され、

明治四十年に宗教大学と改称された。浄土宗本校の初代校長は黒田真洞師であった。大正、昭和の浄土宗、のみならず日本仏教学界において活躍している学人たちは、多少にかかわらず黒田真洞師の影響をうけた人びとである。

本校で育成された人びとのなかには、明治二十一年に入学された、松濤賢定、渡辺海旭、荻原雲来、望月信亨の各師や、やや遅れて入学した椎尾弁匡、矢吹慶輝、大島泰信、笹本戒浄、藤田寛随、石塚竜学、大村桂蔵の諸師らがあり、それぞれ年月に数年のへだたりがあり、学界、教界、社会における活動も多少の異なりがある。

明治二十一年に入学した、渡辺、荻原、望月の各師は、二十八年にそろって本校を卒業し、いずれも翌年内地留学を命ぜられ、渡辺師は比較宗教学、荻原師はインド仏教学、望月師は天台学を専攻した。三十二年には、荻原師が最初の海外留学生としてドイツに留学した。その当時、高楠順次郎博士が、浄土宗本校で梵本の講義をしており、荻原師はその教えをうけていたので、博士の紹介で、ストラスブルグ大学のロイマン教授について梵語およびインド仏教を学んだのである。

のちに望月博士が、「雲来師余影」のなかでつぎのように追想している。

「予と君と相識したのは明治二十一年の九月で、共に入学試験に及第して、東京の浄土宗本校に入り、爾来同クラスで勉強し、二十八年の七月卒業するまで七年間、真の同窓として起居を共にしたのである。渡辺海旭君も同級で、一クラス十二名であった。荻原君は、頭脳明晰な人で、且つ大の勉強家であった。諸学科のうちで英語がもっとも得意であり、英語にかけては全校中、君に及ぶものがなかった。君は青山の英和学校に通って英語を習われたそうであるが、これが他日大成の基礎をなしたのである」と。

ドイツでは主として、梵文「俱舍論釈」や「菩薩地」の研究をつづけ、二十八年にドクトルフイロゾフイエーの学位を得て帰朝した。その後、宗教大学教授、芝中学校長、淑徳女学校長等に就任したが、教育行政の実務は不得意で、大方は短年月で辞して、宗教大学教授、帝大講師、大正大学梵文学主任教授等、専ら学窓の人として、梵文学、インド哲学の研究に没頭されたのである。

(続く)

現代生活と宗教

第二回

ただ一人の学生



土屋光道

江戸時代、華嚴宗に有名な鳳潭ほうたんという方が出られました。越中の人で、若い頃から資生豪邁にして奇気あり。早くから出家を志すも父の許しを得ず、遂に鉄眼禪師につき、後に長崎に赴いて支那印度に行かんとしたが国禁ありて果さず。南都（奈良）比叡に学んで諸宗の奥義を究め、自ら華嚴宗の再興を以て任じた逸材で、後宝永の頃（一七〇四）江戸に出て述作と論難に勉めた気鋒さかんな方で、異説に対しては反駁すること峻烈を極めたるも、その交わるや温情を尽したりと、伝えられております。

その鳳潭が若い修行時代の頃、比叡山で天台四教儀の講筵が開かれるというので、当時住んでいた京都六角堂から毎日往復六里の山道を意とせず、聴講に通った。

ところが、内容が高度難解であつたか、講師の講義が下手だったためか、初め講堂に満ちていた聴講生が一人減り五人減り十人と減つて、数日後には遂に鳳潭ただ一人になつてしまつた。たまりかねた講師は、

「貴僧一人、遠路はるばる来るのも気の毒で

もあり、今日で講義を中止しよう」

と、申し出た。すると鳳潭は、

「そう仰しやらず是非継続してくれるよう」

と、懇望したが、

「しかし、お前一人では」

と、張り合いがなさそうな気配であつた。

そこで鳳潭申すには、

「私一人で淋しいと思召すならば、明日は必ず私が聴講生を二三十人ほど連れて来ますから」

と、いう言葉なので

「山内でもこの有様なのに、京都からよも来る人もあるまい」

と、半信半疑。

「御心配には及びません。必ずつれて参ります」

と、固く約束した。

さて、翌日になって、講師が如何にと教室をのぞいてみるに、聴講生は昨日通り、鳳潭一人であつた。

「やはりお前一人ではないか」

と、質すと、

「いや、三十人はどつれてまいりました」

と、いゝま、鳳潭は袂から小さな伏見の紙人形を三十ほど取り出して、自分の前に列べてみせた。講師はふざけたるにも程がある、侮辱を受けた怒りをあらわして、鳳潭を責めた。

鳳潭は身を正して答えた。

「開講の当初には、この講堂に満ちる程、幾百人もの聴講生がおりました。しかるに一日二日と日が経つにつれて、次第にその数を減じて、遂に私一人になつてしまいました。これ一重に彼等に道を学ぶ志とほしく、法を求める念うすい故であります。そういう輩は何十人何百人いても、魂のない幽霊も同様、この法筵に列する資格のない者達であります。

師が人の多きを望んで集められても、土人形を列べ置くのと何等変わりありません。

ここに連れて来た紙の人形は、彼等が輩と違つて、その場所もとらず、雑談もアクビもせず、まして退席することは更にありませんから、遙かに彼等が輩より勝つており

ます——」

この誠志に深く感じ、かの講師は、その後この鳳潭ただ一人のために連日熱誠こめて法を講じ、遂に終つた。

本来、「学生」とはガクショウと昔は呼んで、学ぶことに生きる人、学ぶことを己が生命とする人を意味した言葉であります。

かの孔子様も、

終日食まず、終夜寝ず、思えども益なかりき、学ぶにしかざるなり

と、学ぶことの大切さを教えられ、自らもわれ十有五にして学に志したと、述懐されています。

今日、学校の数はいふえ、学生数は大変な数になりますが、果してこの「学ぶ」ことを生命とする人、この学ぶ態度、学ぶ志がしっかりと自覚されている学生が何人いるでしょう。

学生とは学校の生徒だけでなく、先生も学ぶことを生命とする人であり、一般の大人も学校にいる間だけ学生ということではなく、一生の間、真実を求め、道に生命をかける学生

でなければならぬわけです。

学校は、人間一代にわたるこの真実を探索する情熱と、真摯なる態度を身につけざる場所である筈であります。

今日も昔も、本当の意味での学生は少なかったとみえます。

今日只今において、紙人形にも劣る退席学生の一となるか、ただ一人、志を貫いた鳳潭をよしとして選ぶか、それは各自の選ぶべき重大な問題であり、責任でありましょう。

さて、大学紛争はますます深刻になつて行くようです。授業を放棄し、本部を占拠し、教授と学生との話し合いはこじれ、同じ校友同志がなぐり合い、火焰ビンや石を投げ合い覆面して、ヘルメットに角棒で武装して電車を停める、ジグザグデモを繰返す。その昔、叡山や南都の僧兵が都大路を集団デモして、強請した姿によく似ています。強直な後白河法王をして、

「塞の目と僧兵ばかりはどう仕様もない」

と、歎かしたといいますが、まことに大い問題は現代の難問であります。

この背景には、世界的規模の社会変革に附随する混乱があり、一つの小さな学校内だけで解決できぬ要因が多くありましよう。過去の既成の絶対的価値が崩壊し、すべてが相対的になり、人は依り処を失い、著しく個人的功利的にならざるを得なくなり、利害を一切にするものが集団となって、その量にものをいわせ、数の力で相手を圧倒しようという風潮がいたるところに見られます。現代はまさに量が質に優先し、数によって質を変えようという時代です。圧倒的武力によって相手国に侵入し、有無をいわせぬ大国の強引な手段、多数の上にあぐらをかいて、少数派を抑える派閥政党、そしてまた、真理を相共に探求すべき場である大学において、「大衆団交」という方式で要求を通そうという有様です。現代程、「一人」の力が弱い時代はありません。しかし、口では大勢で学問の自由、真理の探求を唱えて、氣勢をあげているけれども今の教授及び学生に、本当に学問への真摯な情熱がどれだけあるのか、お互いにその根本から反省しなくては、どれだけ制度や組織が

変わったところで、又新しい対立が生れることです。一概にストをやリ、棒を振舞わす学生ばかりいるとも思いませんし、又そうした中にも、ごく少数の勉学に志そうと努力している人がいることを祈りたい。

今日程に「一人」の力が弱く、「独り」が頼りない時代はありません。

信仰の集いたるお別時や修養会でも、導師の方も来聴者の方々も、集る人数が少ないと何かしら活気がなく、数が多くて賑かだと、何かしら力強く熱もこもる気がするものです。しかし、「この私一人が」という求道の志こそが一番大切なのであります。

法然上人は、ただ一人、本願の念仏を択びとられたアミダ様を自ら択ばれました。親鸞上人また、この師法然ただ一人を択んだのであります。

すべての学生があげてストをやっている時、真理を熱愛する鳳潭のような、ただ一人の学生がいたならば、返って教授の方が啓発されるのではないかと思います。

「弥陀の五劫思惟よくよく案ずれば親鸞一

人が為めなりけり」

と、如来様のみ前にただ一人の自分が立つそうした緊迫した、唯仏乎仏、面授面受の中に真実の火花が散り、真理の血が交よう契機があることを反省し、求道の志し薄く、弥陀を慕う念の浅い人形にも劣る自分を恥じねばなりません。

仏法が榮えるということは人数の多少ではない、道心あるこの一人の有無をいうのであります。

道元禪師も、

「衆の少なきを憂うることなかれ、身の初心なることを顧みることなかれ、紛陽は僅か六・七人、薬山は十衆に満たざるなり。しかあれど、みな仏祖の道を行じき、これ叢林の盛んなんと云う」と、仰せになつています。

一人の鳳潭、一人の親鸞こそ、わが勝友、善知識ではありませんか。



(愛知県岡崎市九品院蔵)

維新のころの人たち

— その五 —

大橋 俊雄

仏教では、古来から須弥山を中心とした世界観を説き、その果てに地獄や極楽が存在し、阿弥陀仏の浄土は西方にましますと説いてきた。それがヨーロッパから科学が輸入されたことによって、地球はまるく、しかも太陽のまわりを自転し月が地球のまわりを運行していると説くようになれば、仏教經典に示めされているところとは、全く異なり、しかも実測によって大陸と海洋を配した世界全図が画かれるということになれば、当然地獄極楽という、私たちが口にするあの世は否定されたことになる。こうなってくれば、仏教の世界観は否定されるところか、仏教は邪説ということにもなり、仏教は根柢からくつがえされてしまうかも知れない。

江戸末期ともなれば、日本には西洋文化がかなり濃厚に輸入され、浅草には幕府の天文台が設けられていたし、地動説を研究する学者もいた。キリスト教にさえ関係がなければ、どのような本であっても、堂々と自由に、国内に入ってくることをこばまはしない。今まで不遇をかこっていた蘭学者たちは、この時とはかりに、仏教天文学の実情に即しない、科学の前に非なることを説こうとする。こうした世情のなかにあつて、仏教天文学―梵暦の研究に生涯をささげたのが、江戸にいた存統と、京都聖光寺に住していた神阿であった。存統は「閩浮提國附日宮圖」「世界大相図」などを刊行して梵暦の弘通につとめ、天保三年七月三河の相応寺で寂したが、

神阿は聖光寺に住し、明治に入ってからでも、なお座敷の中央に須弥山の模型を安置して、日月星辰の運行を示し、誰にてもわかるような説明をほどこし、仏教天文学の正しいことを示さんがために努力し、傍ら梵曆普及のために、聖光寺の門前に梵曆学校をつくらうと計画した。かくて巨石木材をあつめ、着々準備にとりかかったけれども、その業いまだ成らざるうち、同十六年五月十一日知恩院での講演をおえて、寺に帰るや否や不快さおぼえ、以来再びたつことなく、十四日入寂されたという。

神阿は角谷隆音ともいい、その伯父に徳住がいた。徳住は一食長齋・昼食をわかつたず、横臥することもなく、日課念佛十万遍を修するといった荒い修行をつづけた行者であつたから、読書はしてならぬと、弟子たちに固く禁じていた。ただ念仏をのみとなる生活でなければならぬというのが、彼の心念であつた。だが弟子神阿は師の教えをよそに、学問を好むので、しばしば事あるごとに読書を誡められたけれどもおらない。ある時後夜をつとめようとして、本堂にのぼろうとすると、どこからともなく線香のかおりがする。静かにねむり、あたりはシンとしていて、人声さえしない。はて不思議なこともあるかなと、いくつかの部屋を通りぬけていくと、神阿の部屋に出た。神阿はまだねむらず、線香を吹きなが

ら、明りをとって読書している。

ローソクならばまだしも、誰にもさとられまいとして、線香を明りに読書している姿に、二度と注意することなく、ついに神阿にだけは特別に読書を許されたという。

天保八年の初夏、徳住は粟田青蓮院の厚意によって上洛し定信院に留錫して日々公請に赴き、浄土の宗義を講じたことがあつた。このころ、すでに徳住の名は都の内外に、高德の僧として知られていたもので、徳住が在洛していることを聞いた天台宗比叡山安樂律院の真相も、山を下り徳住をたずねた。その時、あいにく夕立ちが降りしきり、雷鳴がひどかつた。以来真相は徳住の学徳に感じ、その教えに帰依し、師として仕え、浄土の宗義を究めるとともに、念仏を修すること厚く、後日江戸に下り、増上寺で宗戒兩脈をうけ、浄土宗の僧になつたという。真相はこうした徳住との出会いを記念し名を雷雨と改めたと伝えている。また、一説に、叡山にいた真相は所用あつて山を下り、京の町にでたとき、折りあしく雷雨に見舞われた。そこでとある寺の門で雨のやむのを待っていたが、なかなか止みそうにない。退屈しのぎに、玄関に行き、障子の破れ穴からのぞいて見ると、小僧の机の上に本がおいてある。親しく手にとってみれば、「帰命本願」であつた。

それ、八千有情の法門は、皆これ苦海を渡るの法船なりと雖も、六八超世の本願のみ、ひとり常没をすくふの教綱なり、これ即ち五劫思惟の善巧、九品往生の法門なるものをや

の一文に接して感動し、「これだこれだ、これこそ余が求めていたものである」といって、つづきを読んでいるうちに雨はすっかり止み、あたりは晴れていた。住僧の許しを得て、山に持ち帰り精読し、これが因縁で意を決して山を下り、徳往の門を叩き、教えを受けたともいわれている。

こうして徳往の門に入った雷雨と神阿は、しばしば法論し



神阿肖像画（京都神光寺蔵）

深更におよぶこともめずらしくなく、時に世態を論じあったこともあった。だが二人は自分の信じたことはどこまでもおし通すという性格で、一歩

として退くこともなければ、妥協することもしない。常に不和勝ちであったことを気にした雷雨は、何かと心になやみ、遂に意を決して山城駒郷の阿弥陀寺に隠棲し、静かに念仏して浄業を修すると共に、天台の研学にいそしみ、月の夜には前庭に出て、阿字観とか月輪観にふけり、密教の行法をも併せ修していたという。

その後、雷雨は知恩院の山上勢至堂の南隣一心院の招きに応じ、副住となり、傍ら彼の学殖をしたう人たちに天台学を講じたこともあったが、明治九年八月正住となつて、五十四世の法燈をついだ。以来、捨世派称念上人の法嗣をしたって戒律を厳持すること堅く、静かに念仏して自行を策勵していたが、同十二年四月七日灌仏会を前にして遷化せられた。なお、彼の学殖をついた人として、自他ともに認めていたのは門弟多いものの中にも勤息義城が、その最たる学僧であったという。



「法語をいただく」

念仏を修せんものは、余行をそしめるべからず。そしらはすなはち弥陀の悲願にそむくべきがゆへなり。(元久法語)

この御法語に続いて

「しかるをいま真言止観の憲のまへには、念仏の行をそしり、一向専念の床のうへには、諸余の行をそしる。ともに我々偏執の心をもて、たがひにをの是非のおもひに住して会釈をなす。あにこれ正義にかなはんや。みなともに仏意にそむけり」といわれています。

この登山状は念仏に対して衆徒の反抗がますます劇しくなり、法然上人遠流の前年であった御年七十四才の時に製作されたものであります。法然上人は無智の道俗在家の男女が念仏を唱えたからといって、学問宗である法相三論がなくなるわけではないし、また天台華嚴の諸宗が衰退することはあるまいといわれました。南都北嶺の学者たちが、念仏を非難することは、念仏もまた仏法である以上正法

誹謗の罪となるのであります。従って念仏を非難する者は「虎狼の害をにげて、獅子にむかひてはしらんがごとし」といわれました。

仏法を信じ、念仏を唱えるものは争論することなく、同じく和合の中に生きる者なのであります。余行の人が念仏を誹謗することはよくありませんが、たとえ念仏を非難する人があったにしても、すくなくとも念仏行者は余行を非難し、余行のひとと争ったりしてはいけません。これは即ち阿弥陀さまの誓願に逆くことになるからであります。

こうした態度が法然上人の一つの特色でもあります。他宗の教義や修行に対して非難をすることがありませんでした。ただ末法の世に生をうけた凡夫の「私」にとつて、適応した修行は念仏以外にないから、念仏を唱えるのであります。

念仏を唱えれば、阿弥陀さまの光明に浴し観音勢至二菩薩にまもられ、智慧のある人、清浄な人と同じような暮しができます。そしてとるに足らない凡夫の身が永遠の生命と合致させていただけます。このことは阿弥陀さまが自らいわれ、自ら誓われたお言葉であります。

ます。釈尊はこの阿弥陀さまのお誓いをわれに教えて下さったのであります。

凡夫の身でありながら、このような生活のできるのは決して死後の問題ではありません。法然上人はある人の問いに答えて、

「問ていはく、摂取の益をかうふる事は、平生か、臨終かいかわ。答ていはく。平生の時なり。平生の時てらしはじめて、最後まで捨給はぬなり。かるが故に不捨の誓約と申す也」

といわれました。

さて念仏を唱える人は、偏狭な考えをすてて、自分の立場だけから相手を判断することをしてないのであります。引用の文に会釈とあるのは教文を解釈することであります。相互に自分の考えと立場だけから相手のいうことを解釈することであります。しかし残念ながらわれわれの周囲にあるものは、対立、抗争、混乱の劇しい渦巻きであります。相手を倒さなければ自分が滅びるという戦場の心理と少しも相違がありません。しかもその反面には目標を失った頹廢が街々にみちています。これでよいのでしょうか。(村瀬秀雄)



松 濤 達 文 筆

——浅草行安寺本堂壁画・60号——

人間はその昔から、天を飛ぶことをあこがれた。その果てることのない青い無限の天空に向って、限りない希望の夢を托して、天空を翔けることを願った。有限なる人間であってみれば、不自由なる人間であってみれば、無限の願い、自在を望むことは、又当然といってよい。

仙人とは、長生不死と共に、羽化登仙した人々をいう。羽を持ち、天かける自在な姿は、その寿命の長久不死と共に、人間が終極的に求めて止まぬものである。「天の羽衣」にあらわれた天女も、子供には淡いおさな語りではあるが人間の願いを、ここにあらわした一つの物語りである。

仏画には、この天女は欠くことができない。仏菩薩に散華する天女、舞楽を奏しつつ、天かける天女。日野の法界寺の阿弥陀如来をめぐる天女の壁画は、淡い暗さの中から踊り出るような天女の画の中の白眉である。極楽の莊嚴は、この天女なくしては、満足することができない。

天女は時代と共にその風貌や、衣裳を替えてくる。しかしかに近代的美人であっても、どんなにモダンな羽衣をつけていても、天女であることには違いない。五色の風に舞う天衣は、唯自在なるもの、自由なるもののみが持ち得る絶対者の造物であって、よく人間のなし得るものではない。



天女の舞

人間は、天空をかけるためにいろいろと苦労した。ある時は手に大きな羽根を持って飛び降り、あの時は背中に羽根をつけて舞ってみた。止むを得ず風に自らの身を縛りつけ、人に綱を引かせて飛んでもみた。しかし、所詮こざかしい人間のおろかな試みに過ぎなかった。

今日では飛行機が、この人間の欲望を満してくれる。ロケットの推進力によって、地球を離れることもできるようになった。無限の天空に向って、自在に飛べる時代になった。だがしかし、そのためにはエンジンを用い、噴射器がいり、更には燃料に頼らねばならない。しかも、一度失速する時は、その機械もろともに、すべては終りである。何物かに頼らねばならないはかなさである。淡い夢は、一瞬の奈落となる。

天女は何物にもよらず、何物にも煩らわされず、まさに思いのままに、思う所に、自らを置くことのできる自在者であり、絶対なる者である。そして、それは人間が夢み得る最も優美で、優雅なものの表象である。

限りある人間が、この天女に托する夢は、それ故に、人間の存在する限り、尽きず望まれ願われ、そして、画かれていくに違いない。この画も又、その一つである。



あたたかくひろく

合田微雪

遺骨・位牌・墓、我々はそれに合掌するが故人の本当の魂は早やそこにはない。なら何処に？ 即ち己が胸中、心の奥底にこそ存在する。ゆかりの地というのがある。が、碑・神社・仏閣等ができると、早やそこはゆかりの地ではなくなる。なら何処に？ 己が呼吸し、生活している環境にこそ。

仙崖和尚の草画に、無心「指月布袋」というのがある。「直心に月は見るべきもの。指頭に月があるかの如く錯覚してはならぬ」と死化粧というのがある。息を引取った人の顔に、紅・白粉で彩るのだ。我々は生きている間の人の心を深く汲み、後顧の憂いをなくし度いものである。

もし法然上人御在世時生きていたとしたら自分は本当に御徳をお慕いしていただろう

か。それとも罪にお落しした側の肩を持つていただろうか。昭和十八年正月「討ちてし止まむ」「鬼畜米英」等の揮毫を用意し拙宅に現われた一書道家に「四海兄弟」の四文字を所望したこの身ながら、熟考するに当時の世情に対しあやふやな態度であった事否めない。

また「旅は道連れ」というが、旅のうち一番長く重要な旅が人生である。

人生とは旅を考えることであり、旅は人の心を清浄にする。そう心得て旅した時、実に意外な場所で、生涯忘れ去ることのできぬ美しい心象風景を発見し、また図らずも真に御仏を感じさせる人物と邂逅することもある。

遠地の娘夫婦の所に急用生じ、咄嗟の事とて乗物は夜の急行自由席しかない。それでも

すぐ空席ができたのは不幸中の幸であった。向う側の席は三十三才と二十才の若夫婦。職業は運転手だそうだが、妻は夫に「あなた」と呼び、いずれも言葉使いがよい。幼時から隣り同志の仲良し、恋愛結婚で、おだやかな夫君に、無邪気そのものの如き妻君。実に良きカップルである。

が、小生は急にこの列車が早く目的地へ着けばよいという気に襲われた。顔立こそ違えその若い妻君に、今から違ひに行く娘の面差しを覚えたからである。色々と話しているうちに夜も更け、三人共睡気を催してきた。と矢庭に妻君は夫の膝の上に全身を投げかけ、俯せになった。がむしやらに寝入ったという感じだ。そこで夫は当方の席に自分の脚を延ばしたそうしながら、躊躇している。

「遠慮なくどうぞ。僕もそうさせてもらいましょう」

と、小生も脚を相手側にのばした。こんな時の用意という訳でもないが、小生は白色が好きで、先年娘の学卒祝いに同伴旅行の際にも、夏でもないのに、白ネクタイ・白靴・白靴下（といってもシルバーグレー）で通した。清潔感がある。仏間のある畳の座敷ではその靴下が、展覧会等の豪華なジュウタンの敷かれた場所ではその靴が殊に相応しかった。

かれこれ二時間位経っただろうか。フット目が覚めた。何んだか足の甲が懐炉でも当てた様に温い。朦朧眼で見ると、のびした自分の足に、まっ黒い物がかぶさっている。よく見ると、それは女の乱れた黒髪で、何とその下に若い妻君の顔がある。そして片頬から口にかけて小生の足にくっつけたまま、フーフー呼吸しながら熟睡している。

何んという天心。夫君はと見回したが、不浄にでも立ったのか、姿が見えない。いくら清潔そうな白靴下でも気が引ける。相手の目を覚まさせぬ様に、ソッと脚を引いた。その

時夫君が戻ってきた。そして妻の体を抱える様にして、己れの膝の上にのせた。さすがに前に任せきった妻君、全く正体ない。側にあったハンドバックをタオルにくるみ、枕にして与えた夫君。何という深い思いやりだろうと、つくづく感心せざるを得ない。

が、暫くして夫君は膝が傷くなってきたのか、妻の頭の位置をずらせたりしている。そのうち小生もまた睡りに落ちていった。

やがてすがすがしい朝となった。目覚めると二人はもう起きていて、洗面所から帰った妻君の顔にはほつれ毛一つない。といってもただ七三に分けた髪は頭のあたりで断つてあり、化粧も施さず、花嫁というより少女のおもかげ、「清らか」そのものである。夫君が「ゆうべ、膝がしびれ通しだった」

「アラ、どうして？」

と、聞き返され、

「イヤ」

何んでもないと、ただ微笑んでいる。

だがそれ以上聞き咎めもせず、何事もこたわらぬ妻君。いみじくもその様に仕込んだと考えられる優しい心根の夫、彼は昨夜中妻の

ために、己が膝を提供し続け、しびれをきらしていたのだが――。ただ単に夫としての愛情に止らず、兄の如き思いやり深く、父の如き献身的なこの年上の夫。榮光あれ。

こうした行為はまず「真心」によって生れ「心がけ」によって達成されるものだ。そしてその結果、一番救われるのは好意を与えられた者より、与えた本人なのである。

後で独りしじみと思った。あの若い夫君の面差しから、勿体ない事ながら、大慈大悲の御親を感じたのである。彼の頭上に光背を見たといったら、お叱りを受けるだろうか。彼の顔形はいずれ忘れる時が来よう。が、その何事も赦すという胸の温かさだけは永久に小生の胸から消え去ることはあるまい。

それにひきかえ、己れは如何か。子供達に對し完璧な父であり得ているか、亡き父母に對し生前尽す事の少なく、そのお詫びと申訳に仏前の燈明をあげているのではないか。

一度度損ねたテレビは二度と見られぬ。

口先だけでは駄目である。その深い反省がやがて本物近くなった時、改まった心で御本山にお参りする覚悟である。

人 俳

一茶の生涯(三)



大 和 琴 二

故郷やよるもさはるも茨の花

故郷は蠅まで人を刺しにけり

いくたびか郷里に帰っても容れられず、その都度江戸をさして出かけねばならない心境は推察するにあまりがある。

おのれやれ今や五十の花の春

五十の春を下総で迎えた一茶は、みずからの髪を白さをみるにつけても、郷土への思慕の念やみがたいものがあった。

漂泊生活三十六年、長い歳月を心たのしむという日は一日もなく、旅から旅へとさすらいつづけ、そのかみの少年弥太郎は、いまは「己れ知らずして終に白頭翁」となつてしまつたのである。郷里にて借家生活をはじめた

一茶は

これがまあ終の栖か雪五尺

と溜息のような句を作っている。

借家生活の中に文化十年の新玉を迎えた一茶は、本腰をすえて継母たちとの談合をはじめた。しかしながら、継母たちの態度はいつもの通りで一向に將が明かなかつた。しびれをきらした一茶は、当時柏原は御天領であつたので江戸に出て公儀に訴えようと決意を固めた。これをききつけて村人は驚き、明専寺の住職も捨ててはおけず、法衣の袖にこれを引きとめ、同村の銀蔵というものをしめて兩者を諭さしめた。

一茶の固い決意と、明専寺住職の内意をうけた銀蔵の斡談に、いまは継母たちも言を左

右にすることができなかつた。一茶も初滞金三十兩の内若干の金を譲歩することとして、父弥五兵衛没後十数年にわたつての悶着はついに終局をつげた。一茶は五十一才にして、はじめてここに家屋敷と山林、田畠若干を所有することができたのである。

間口九間の住居は、四間半ずつに仕切られ遺言によつて継母たちはその北方に住み、一茶は南方に住むことになつた。

いうぜんとして山を見る蛙かな
悠然として山を望む蛙こそ、一茶自身の姿であつたのである。

いざこざを解決し、心やすらかに近郷の俳友、門人を歴訪していた一茶は、この六月、善光寺の祇園を見に行き、桂好亭で癪を思ひ

七十五日ほど臥床した。癰は命とりといわれるほどで、一時は発熱甚しく「火の車に乗る苦しみも是には過ぎ」。「無常の風の烈しきと、病の悪鬼の恐しさは仏も免れ給ふこと能はず、まして荒凡夫の我々、いかでか是を避く事あらん」

と死を観念したのである。

美しや障子の穴の天の川

名月や寝ながらをがむ体たらく

入らば今ぞ草葉の陰も花に花

晩年の作にもふさわしいこのような静かな句が病中から無数にうたわれている。昨日までの財産あらそいは、父の遺言という美名に随ってはいけるけれども、実をいえば継母たちに対する嫌がらせもあった。また土に落ちつこうとするのはよいけれど、それ以上に物質的な安定を望みすぎはしなかっただろうか。仙六側からいえば、いかに長男だといっても少年時代に家をとび出した一茶が、何十年ぶりかで舞いもどって、田畑をよこせ、家屋敷をよこせと言いつつも、おいそれと渡せるものではない。しかし継母がのしればのしるほど、一茶のエゴイズムを執拗なもの

にした。

一茶はこの病中に、みずからの片意地を静かに反省せざるをえなかっただろう。

二

文化十一年四月、一茶は五十二才にして初めて妻を迎えた。人生五十年というのに、一茶は五十二才にして人生の再出発をしているのである。妻は隣村赤川村の百姓常田久右衛門の娘きくで、時に二十八才であった。

荒びきった冬枯の野に一度に花が咲いたような人生が一茶に訪れてきた。一茶の生涯でもこの頃が一番幸福な時代で、このよろこびにあふれた句が、日記の随処にみられる。

賀星やはらはら竹に水祝

我が菊やなりにもふりにも構はずに

妻のきく女は、なりふりにもかまわずに年老いた新郎一茶にかしづく良妻であったのである。

はげしい肉身との争いをへて、ようやく家を得、妻を得た一茶は、俳諧師としてもすでに社会的な地位が高められ、その作品も充実した時代を示している。きく女との仲も不思議なほど睦まじかったが、不幸はつぎつぎに

一茶の家庭をおそった。生まれでた子供たちは亡くなり、家庭人としてはあくまで不遇であった。

長男の千太郎は妻の実家で生むという土地の風習に従って、五十賀の一茶が赤川まで同道して産ませている。そのよろこびも東の間に翌月十一日にはもう亡くなってしまった。

文政元年五月四日、今度は女の子が生まれた。そのときも他に人手のない一茶は、きく女を実家へあずけた。こんど生まれた女の子は、敏く育つようにと名前を、さととつけ、

這へ笑へ二つになるぞけさからは

と、その生長を薬しんだが、これも痼疾を病んで、初誕生すぎて間もない六月二十一日に死んでしまった。

文政三年十月二日、二度目の男子が生まれた。こんどは「磐石の立てるに等しく、したたか長寿せよ」と石太郎と名づけた。しかるに、この石太郎も、生まれて九十六日目にくなくなってしまう。この場合は、母親の不注意らしく、一茶は「母にしめしていふ。此さざれ石百日あまり経て、百貫目のかた石となるまで、必ず背に負ふ事なかと、日に千度

いましめけるを、いかがしたりけん、生れて九十六日といふけふ、朝とく背負ひて負ひ殺しぬ——」と妻をのしっている。

文政四年というとき、一茶はもう五十九才になつており、老の波がひたひたと足許に感じられた。この前年、石太郎が生まれて間もない頃、浅野への途中、淡雪にすべつてころぶと同時に、かれは中風にかかった。五里の道を駕で柏原へ帰り、大根おろしのしほり汁で半身不随を癒したが、江戸との間を何回となく往復した健脚無比の一茶ではなくなつた。それでも暮までには、足だめしに古間まで歩ける程度になつた。

一茶は、老先きの短いことを知るにつけてもいよいよ子を得ることに焦慮した。その日記の中には強壯薬として人參をはじめ、諸種の薬用療法など随処に書き入れている。

文政五年三月十日、さらに三男金三郎が誕生した。金三郎の名は石太郎の場合と同じく金鉄のように強く育つようにとの縁起をかついだものだろう。この年の七日、赤川のきく女の父親が死んでいる。その日記に、

十一日晴 巳刻三好ヲ立 未刻柏原ニ入

去九日赤川老父没シテ菊女行、金三郎一茶名代ツトムト云

とある。三好は善光寺の三好屋という薬種屋一茶の門人文路の家である。善光寺から柏原へ帰宅すると、その不在中に赤川の父親が亡くなり、きく女がそれへ行つたというのである。ここに「金三郎一茶名代ツトム」が面白く、生まれて四カ月しかたない金三郎でも、男は男、一茶名代として葬式に列なつたというので、この赤子にかけた一茶の期待が思いやられる。

文政六年二月から、こんどはきく女が病みついた。何人かの子供を次々と産み、しかも次々に喪つて行つたきく女は、肉体的な疲労と、精神的な傷手に、この前年から、ぶらぶら病氣になり、出先の一茶が、急いで帰宅したというようなこともあつた。

しかし、五月十二日、雨のそは降るなにきく女はとうとう三十七才の若さで生涯を閉じた。平凡で無智で、一茶の俳諧生活にはなんの理解もない妻女であつたが、柔順で、ほくとして、わがまま勝手な一茶に、十年もつかえた。それだけではない。壁隣に住む仙六

母子との間や、親類づき合いに心を砕いたりゆたかとはいえない家計のやりくりを一人で引き受けてくれたのである。

一茶の悲嘆、落胆、困惑は、一通りのものではなかつた。

それだけではなかつた。赤渋にあずけた金三郎が、この年の暮の二十一日に亡くなつてゐる。金三郎をあずけるととき、赤渋の富右衛門は、自分の娘の乳は、樽の口をぬいているように出るといふ口上であつた。ところが事實は養育費はしさの仕業で、栄養不良におとしられてしまつたのである。

きく女との結婚生活十年、これは全く悲劇の連続であつた。三男、一女をこごとくなくし、ついにはその妻女にも逝かれてしまつた。一茶はまた十年前の孤独に立ちかへつたのである。

三

文政七年、一茶は六十二才の春を迎えた。

四月廿八日晴、弥市飯山行、一茶夜尿と日記にあるように、一茶は一夜不覚にも尿をもらしてしまつた。このように老いほれた一茶は、その五月、二度目の妻を迎えること

になった。

十二日晴、飯山家中田中氏女イキ卅八今夕来

これが再婚の記録である。五月十二日は亡妻きく女の一周忌にあたっており、一周忌までは独身を通そうという一茶の心づかいが、この日を選ばせたのだらう。今度の妻イキは飯山藩士の娘であつた。イキ女は微禄でも藩士の娘であり、しかも三十八才の女さかり、六十二才の一茶にかしづくには、きわめて不自然であつた。

八月三日晴、犬鯉節一本引 イキ女離縁ト英来

日記の書入れが示すように、同棲三カ月であつさりこれを離縁してしまつた。「犬鯉節一本引」という出来事と、離婚を普記しているのもおもしろいし、「ト英来」のト英は一茶の門人、イキ女が実家へ帰つたあと、また門人と俳諧を話しあっているのも興味ぶかい。

しかし、一茶は未だ孤独の生活で終ろうとは考えていなかった。

その翌年、文政八年、果して三度目の妻を

迎えている。当時柏原の薬種商小枳屋太兵衛宅に乳母をしていた、やをという三十一才の女であつた。一茶はこの時六十三才であつた。やを女は前のイキ女とは違つて実直な女であつた。他家へ奉公していたという苦勞人のやを女は、晩年の一茶によくかきずき、その臨終まで面倒を見た。文政十年十一月十九日、一茶が没したとき、彼女の胎内には子供があつて翌年四月女児が産まれ、それが、やたと名づけられた。一茶生涯の念願は、その没後にとげられたことになる。

我上へ今に咲くらん昔の花

文政十年卯月の頃の作で、一茶自身、この年が終の浮世であることを自覺しているようである。中風以来、めつきりと衰えをみせてはいたが、しかし駕による門人歩きは、善光寺平全城におよんだ。あくまで氣力で生きぬいたのが一茶の人生であつた。

この年の六月一日、柏原に火災がおこつた折柄の烈風にあおられ、火の手は、一茶の住居をも灰尽にしてしまつた。体の不自由な一茶は、隣人に負われて、裏の田の中へ避難した。火が鎮まつてから、かろうじて焼け残つ

た土蔵を住居とした。その頃善光寺平一円は一茶の有力な門人が散在していた。かれらはあたふたと見舞いにかけてけるとともに、不自由な土蔵住居を察して、しきりに避難かたがた来遊をすすめた。

焼土のほかりほかりや虫騒ぐ

この頃の一茶は、中風のため、もう舌もまわりかねていたのである。春畔に「私参るまで」と書いているから、これから駕にゆられて紫へゆき、さらに湯田中の希枕宅に滞在していたらしい。そこにおいてお盆を迎えて、

御仏はさびしき盆と思すらん

という句がある。祖母をはじめ、父母やきく女や、三男一女も、今は小丸山の墳墓に眠っている。魂祭の家もなく、墓参をすることもできず、他郷に老病の身を横たえる一茶の氣持をよくあらわしている。

送り火や今に我等もあの通り

生身玉やがて我等も孤の上

同十一月十九日、病あらたまり、あの焼け残りの土蔵のなかで、一声の念仏を期として波瀾万丈の生涯を閉じた。

(終)

「十人十色」とはうまくいったものです。この社会を形づくるいろいろな性格をもった人々はお互いの感情をぶつけ合いながら、日々を喜怒哀楽の中に住しております。この最も端的な表現方法の一つに涙があると思います。人はうれしいうれしいにつけ、悲しいにつけ、涙を流し、他の人々の共感を求めております。これはその例としては不適當かも知れませんが、生後一年四カ月になる甥は、最近になってよく泣き真似をいたします。辺りの様子をうかがい、誰もいないと分ると、何もなかったかのように、他のいたずらを探し始めますが、誰かがそばにいと、それは大変なもので、

涙



ので、本当に涙を流し、更に激しく泣きわめくのです。うるさいものですからなだめると今度は一本取ったとばかりに、笑顔を見せるのです。

小さな子供の仕種故、憎むことはできぬがこの頃より人は涙が自分を表現するのに使う有効な武器であると心得ているのかも知れません。

また人は年老るにしたがって、涙もろくなつてくるといわれております。成年時代には冷酷であったといわれた人でも、年老るにつれ、その性格にも温和さが加わり、人望を得ているのを見かけることがよくあります。こ

れもその人が他の人々と共に涙を流したということによって得た結果であることはいうまでもありません。

次はその卑近な例ですが、一昨年死亡した伯父は人一倍涙もろい方でした。それでも若い頃は大変きびしい人であったそうで、自分の納得のいかない事はがんとして受けつけなかったそうです。しかし、感激派の伯父はよく他人の面倒をみ、自分のことのように涙を流したそうで、周囲の人々にはその威厳がましい態度からは想像すらできなかったよう

だ。そんな伯父の話しを聞いていた私は、晩年伯父が中風のため身体が不自由となり、家で

酒井 達雄

ぶらぶらするようになってから、よく映画などに誘いましたが、

「成程、伯父がきびしい人であるのに、みんなから慕われるのはこういう時なんだなあ」

と、思ったことが行く折々にあった。それは伯父が見ている映画のドラマの中にけ込み、あたにかまわず涙き出すことがしばしばあったのです。他の人々が笑いながら見ている場面でも伯父にとっては何か心に感じるところがあったのでしょうか。こんな伯父の姿を見るにつけ、本当に涙ける人はうらやましいと思うことしきりでした。

— — —
という私も伯父程ではありませんが、涙もろい部類にはいる方です。

過日、私は某デパートに勤める友人Mの結婚式に出席した。その日は良日であったためでしょうか、十数組の結婚式があり、はなやいた雰囲気か式場いっぱい満ちあふれており、他人のこととはいえ、なんともいえぬ気分爽快なひと時を過ごしました。六十余人の列席者がほとんどMと同年配の同僚と友人であ

ったためか、披露宴は最初からリラックスした中で進められた。普通ならば、新郎・新婦の良き面のみが紹介されるが、この日のそれは二人の失敗談・欠点の暴露の連続で、笑いに笑う宴となっていました。

しかし、いよいよ終りに近づいた時、その宴は一変して感動の場となったのです。というの、今は売場こそかわったが、Mが入社した時の上司であり、その後も良き理解者であるYがしめくくりの挨拶に立った。Yはここにこしながら立ち、そして、

「新郎M君が私のもとに来た時は学生服に身をかため、それは実直そのものでした。そして今ここにいるM君はモーニングこそ着ておりますが、その頃の素直な気持と少しも変わってはいりません。M君——」

と、いいかけ、一瞬絶句し、うれしさのあまり涙を流し、あとのことが出なかったのです。

日頃のYの仕事ぶり、性格を知っている列席者はその急変ぶりに驚き、なんともいえぬ空気が宴内にただよいましたが、すぐにYの

気持が伝わり、女性はハンカチを目もとに、男性は下を向き、もらい泣きしてしまつたのです。私とて例外ではありませんでした。日頃のYとMをよく知っている私は、無言の中に二人の心のかよい合うさまが手に取るように分り、涙をおさえることができませんでした。

— — —
涙はうれしいにつけ、悲しいにつけ所かまわず出てしましますが、うれしい涙はその中に本当にうれしいという素直な表現を、悲しい涙はその中に本当に悲しい、つらい、せつない気持を表現していると思います。どちらにしても涙は人が「感情の動物である」といわれることの最も端的な表現方法ではないでしょうか。この意味から、悲しい涙を流す際には、それをこれから来るであろう安穩な生活への防波堤として、うれしい涙を流す際には、その仕合わせを持続させる生活への防波堤として、いつでも素直に流せる涙のある日々を過ごしたいと思う頃々です。

法然上人の念仏に有縁の喜び

読者の声

雑阿含經に『貪欲（むさほり）永く尽き、
瞋恚（いかり）永く尽き、愚癡（ものごころ）の道理
に明らからず（ないこと）永く尽き、一切の諸の
煩惱永く尽くるを涅槃（ねはん）という』と、仏教の最
終目標とそこに到達する修行の要件が明らか
に説かれております。法華經には、これを日
常生活の中に実践するように種々の譬喩・言
辭をもつて説かれております。

しかし、法華經に説かれているものは完璧
な教えではありませんが、あまりにも難解のた
めこれを理解し、実践できた人は誠に少な
かったように思われます。それ故、法華經如来
寿量品の最後に『もししたら衆生を最高の道
まで導いて、速やかに仏身を成就させられる
であろうか』と、あるのを見ましても判りま
すように、釈尊の力をもつてしても、法華經
による衆生教化は困難であつたのであります

そこで釈尊は衆生が理解し、実行できる仏
道修行の方法として説かれたのが観無量寿經
であります。これは釈尊の本願が説かれてあ
る無量寿經を観察し、その真髓の教えである
という意味から、観無量寿經と名づけたもの
でありますから、仏教の最も大切な經典の一
つなのであります。

この經典は、法華經が戒律による衆生教化
のものであるのに対し、一切の戒律を離れ、
直接阿彌陀仏を通して宇宙の真理に触れさせ
るものであります。しかし、この經典にも観
想と念仏の二つが教えられております。観想
はまず太陽が沈む時の観想から始まって、淨
土の莊嚴の有様の観想など十三あって、これ
を順序を違えず、眠っている時以外は常に想
えというのでありますから、この十三の観想
を間違えずに覚える事も、また難事でありま

す。釈尊は『もしこの観想を行ずるのが困難
な者は常に阿彌陀仏を念ぜよ。阿彌陀仏を念
ずるに違なきものは、無量寿仏の名を称え
よ。このように至心に声をして絶えざらしめ
十念を具足して南無阿彌陀仏を称えよ』と、
觀經の下品下生に説かれております。これは
声を出して常に南無阿彌陀仏を称えよといふこ
とであります。

何故釈尊がこのように観想し、阿彌陀仏の
名を称えさせたか、即ち念仏をさせたととい
いますと、法華經においては戒律をもつて自
力で五欲への執着を除かせることに失敗した
ため、観無量寿經で釈尊は凡夫が無意識のう
ちに、常にその執着から離れるように導いた
のであります。

観無量寿經に戒律に全く関係のない観想と
念仏が説かれていますのはそのためでありま

す。法然上人は観想と念仏の兩者のうち、凡

夫の行なえるのはどちらかをお考えになり、ここで観想を捨て、念仏を選ばれたのであります。而も釈尊が念仏を説かれた理由は、常に五欲への執着の心を除かせるためでありますから、念仏する場合でも五欲から執われ、心を離すことが理想であります。そのために法然上人は一枚起請文に『観念の念にもあらず、又学問をして念の心を悟りて申す念仏にもあらず』と、ここで何ものにも執われない無念無想の法然上人独自の念仏が教えられ、これにより観經の眞髓を把握し、常に仏名を称えよという、釈尊の教えの通り、法然上人御自身も行ない、人にもそのように勧めたのであります。

それ故、法然上人の念仏は観無量壽經の小品下生に説かれていた至心に声をして絶えざらしめること、又冒頭經文の貪欲・瞋恚・愚癡を永く尽きさせること、及び観無量壽經第三觀に説かれた睡時を除き恒にこの事を憶え、という總ての教えに通ずるものであります。法然上人の念仏は釈尊が説いた浄土への道、即ち幸福への道を歩んでいる事になる

のであります。

このように法然上人の念仏は釈尊の教えをそのまま実践する実にすばらしいものであります。又この念仏の眞意を知らない日蓮正宗創価学会では、念仏者は無間地獄（間断なく苦しめられる状態）に墮ちるといつてこれを誹謗しております。しかし、それでは日蓮正宗の題目が果して念仏より勝れているのでしょうか。一寸考えてみましょう。

法華經方便品に『我是の如き人、来世に仏道を成ぜんと記す。深心に仏を念じ、淨戒を修持するを以ての故に』と、ありますが、これは釈尊が心から仏を念じ（念仏して）淨戒（四諦の法と十二因縁の法）を常に護って修行する者は、将来仏になれることを約束する（記す）と、説かれたのでありまして、念仏は全仏教を通して一貫した信念であることがこれで理解されるのであります。

このように釈尊は法華經にも念仏を説いておりますので、念仏を誹謗することは間違っているのです。本来、法華經は四諦の法、十二因縁の法を戒律により、自力で学び体験する教えでありますので、本尊も題目も

必要ないのであります。それ故、法華經のどこを見ましても『これを本尊とせよとか、題目を唱えよ』とは書いてありません。そこで創価学会で用いている本尊も題目も共に、法華經に全く関係のない作りものであることになり、その眞實性を法華經に基づいて説明することは誰にもできないのであります。

このような理由で、法然上人の眞理に基づく念仏と法華經に何の関係もない妄想の題目との優劣は自ら明白であり、法然上人の念仏だけが最も勝れ、尊いものであることが理解できるのであります。私達はここで、法然上人のすばらしい勝れた念仏に縁のあったことを深く喜び、上人の教えを護り、常に念仏し念仏の中に安らかな毎日を通すようにしなければならぬと思うのであります。これが幸福への唯一の道であると確信しております。

取次書籍

故眞野正順著

「無量壽經講話」

B版四一〇頁
定価五三〇円送料七〇円



現代宗教論

(その二)

芸術と学問

竹中 信常

一 宗教と芸術

このごろはデパートなどでよく神社や仏閣の宝物展を開催する。また観光ブームで大勢の人が京都、奈良、日光、鎌倉などに出かけて、古い日本の芸術を観賞することがはやるようになった。まことに結構なことであるが、考えようによると、手ばなしで喜んでばかりもいられない点がある。

京都へ行って観光客にまじって神社やお寺めぐりをしてみると、どこへ行っても、手を合せて拝んでいる観光客はほとんどいない。仏像や神殿を見世物のようにお金を払って見物するという態度である。本来は拝むためにつくられたもののに、それが全然おこなわれなくなってしまうのは、一体どうしたことなのであろうか。お金を払ったからという観光

客が悪いのか、お金をとって見せる神社やお寺が悪いのか。むずかしい問題である。

とにかく、京都、奈良、日光、鎌倉と、日本のおもだった観光地から神社と仏閣をぬき出してしまったら、あとには何にもこのらない。それほど日本には仏教と神道がひろく行きわたっているといえる。このことは西洋も同じで、ヨーロッパの主な都会からキリスト教に関係するものを取り去ったら、ランドウになってしまう。そしてそれは、人間の歴史あるいは文化の中で宗教が占めて来た位置がいかに重要なものであったかを物語ると同時に、人間の精神生活にとって、宗教がぬぎがたいものであることを示している。見方をかえれば、それは宗教が芸術という形で人間の生活の中に生きているものでもあるのである。

それなら、芸術と宗教とは同じものかというところ、そうでは

ない。芸術は、絵画にせよ音楽にせよ文学にせよ、「美」を求め、「美」をつくり出すことを目的とする。奈良の薬師寺の弥勒像にしても、ミロのヴィーナスにしても、永遠に変わぬ美をあらわしている。人間、どんな人でも、きたないもの、醜いものよりは、清浄な、美しいものに心をひかれるのが自然である。芸術は人間の心の底にある美を求める希望を実現するという任務をもっているのである。したがって、極端にいいかたをすれば、少々悪いことをしても、立派な作品をつくれば芸術家といわれる。天才と狂人とは紙一重のちがいといわれるが、偉大な芸術家は往々にして常人とちがった性格をもっているものである。だから、芸術家としては立派だが、人間としては完全とはいえないのである。

芸術はただ見た目だけの美では本当の芸術ではない。見た目と同時に、魂の奥底まで洗われるような精神的な美を秘めてなければならぬ。しかし、精神的な美を完全にあらわすためには、これをつくる芸術家自身の心が美しくあらねばならない。舞踊の名人は日常の所作、歩くのも、話すのも、すべて優雅で美しいが、それと同時に気持ちもやさしくて典雅であるといわれる。また茶の湯でワビとかサビとかといつて表面にとらわれずに、ものの奥底にあるものを掘みとるこ

とをすすめるのも、やはり精神の美を求めることにほかならぬ。

こうなると、それはも早や手先のことではなく全心全霊全生活をそれに打ちこんでゆかねばならない。そうなれば、それは単なる芸術の域からすでに宗教の世界に入っていることになる。なぜなら、宗教というものは全精神をかたむけ、全生活をかけるべきものだからである。片手間に、病気がなおるまでとか、お金がもうかるまでやってみようなどというものではない。それこそ一生涯を通じて、いのちを賭して念仏に打ちこみ、アミダ仏の慈悲の光につつまれて、幸福な人生を送るべきなのである。

昔の坊さんに偉大な芸術家がいたのも、こうした真剣な態度が芸の上にあらわれたからである。その反面、一芸に打ちこんだ人はしらずしらずのうちに、立派な宗教的信仰を抱くようになる。

俳句で有名な一茶にしても、芭蕉にしても、その生涯をみると、なまはんな坊さんよりはるかに立派な仏教信仰にあふれている。

雀の子、そのけ、そのけ、お馬がとおる 一茶
一羽の子雀にさえ限らない慈悲の心をそそぐ気持は、その

まま仏の心といえよう。

芸術というものは、このようにして、宗教信仰に裏づけされてはじめて完全なものになるのである。

現代人は余りにも表面だけにとらわれて、そのウラにひそむ本当の価値を見おとしがちであるが、なにによらず、その裏側にあって支えとなっているものが、強い宗教的信仰であることを知るべきである。

二 宗教と学問

このごろの出版界のブームの一つに仏教書がある。仏教に関する本がよく出版され、それが意外によく売れるというのである。仏教のためにはまことに結構なことといわなければならない。

しかし、注意してみると、売れているのはごく一般むきのやさしいものが多く、しかも専門の坊さんや学者が書いたものよりは、一般の仏教信者の書いたものの方が親しまれている。仏教というとすぐ「仏教はむずかしい」といわれるほどに一般の人にはなじめないのだが、それを何とかわからせようとするところにむずかしさがある。

なるほど、考えようによれば、むかしは仏教を学問の一種であると考えたこともあった。漢文でかかれた經典を読んだり、ややこしい理論を研究するのだから、一種の学問と見られたのもムリではなかった。キリスト教では神学ということがいわれるが、これはキリスト教の信仰を学問的にウラづけるものとされ、一種の学問と見なされる。

仏教の經典を開くと、仏教信仰のことはむろんであるが、それ以外のことも色々と書かれている。たとえば天文、地理歴史、哲学、医学、動植物など、今日の百科辞典のようにあらゆることが述べられている。そして、こうした知識がだんだんに発達し、独立して今日みるような学問になったのである。

それゆえ、ヨーロッパの中世期には、あらゆる学問の上にキリスト教神学がその権力をふるったのである。聖書に書いてあることは絶対に真実であり、これとちがった考えや思想をもつことは厳重に禁止されていたのである。

日本でも、徳川時代にはまだまだ仏教の学問がさかんで、お寺の坊さんが、一番の知識人とされていて、わからぬことがあったらお寺へ行ってきけとか、子供が生れると坊さんに名前をつけてもらうとかということがよくおこなわれたので

ある。

ところが近代になると、学問は宗教から分れ、独自の発達をとげるようになってきた。そして、ときには宗教とはまるで反対の立場をとる場合もでてきたのである。とくに自然科学の領域では、今日ではまったく宗教と学問とは逆になって科学が宗教を支配するようになった。たとえば、迷信は科学的に理窟と合わぬ悪い信仰というが、この理論を押しすすめて宗教はアヘンであるとかまでいうようになった。

それなら、学問が発達して人間は幸福になったか。また、平和な世界が現出したかというところ、これは全然逆である。戦争はいつの世になっても絶えないし、その方法は学問の進歩とともに残酷なものになっている。人間はますます不幸になり、争いつづけていかねばならない。

なぜなのだろう。人間の理性が発達し、学問がすすむのとなを愛し、ものを大切に、感謝の心を抱くことは全然別なのではないだろうか。頭の良いものほど悪智慧をはたらかせ、自分の学問を鼻にかけて威張りちらす。

してみると、人間というものは学問や地位や財産だけでは完全な人間とはいえないようである。たとえ貧しくとも、ロクな教育をうけなくとも、ニコニコと笑顔で暮し、黙々とし

て他人のために尽す人もある。こういう人こそ、立派な人間といわなければならないまい。

法然上人のお言葉に

「されば、としごろ習いたる智慧は往生のために要にもたつべからず」(念仏問答集)

とある。学問は往生の役には立たない。ただひとすじに念仏するのみだといわれる。また、

「往生のためには念仏第一なり。学問すべからず」ともいわれている。

法然上人は智慧第一の法然房といわれたくらい、頭がよくまた学問も当時第一流であった。このような法然上人も、アマダ様の前に出、信仰の世界にあっては、一文不知の愚鈍の身で、赤坊のようになにもしらぬものだといっている。

要するに、学問と信仰とは別のものであり、学問は人間の理性を発達させるが、宗教は理性をふくめた全人格を完成するものなのである。それゆえ、学問は当然宗教のなかにつつみこまれるわけである。学問をするということはおのれを完成させるためであり、そのためには念仏信仰の大きな力が必要なのである。

(続く)

編 集 後 記

○ 秋も深まり、野山を染める紅葉は漸々とふもとにしのびより、やがて散りゆく此頃、朝夕の寒さも身にしみるようになりましたが、いかがお過ごしでしょうか。

幸いにも今年は台風による被害も例年程ではなく、米作も史上二位の豊作とのことによりです。

○ 秋とともに、各方面ではいろいろな行事が取り行なわれております。その中でも先月中旬より開催された第十九回メキシコオリンピック大会は中南米に於ける最初の開催で、国民あげての大会の模様は、四年前の東京オリンピックに勝るとも劣らない、色彩豊かな大会で、宇宙衛生による中継を見ておりますとその感激が再びおとすれたような気がいたしなるといえぬものがございました。

○ それにしても、この大会中、一時中断され

たとはいえ、オリンピックの開催さえ危ぶまれた学生騒動は他国のこととは申せ、現在ゆれ動いている我国の学生運動と同一視せざるを得ません。学生の政治への参加、このこと自体の良し悪しはその度合により、見方により賛否両論あるでしょうが、学生の本分としての学人の初心を呼び起し、よき方向への解決を願いたいと思います。

○ 一方、宗内でも秋にはいろいろな行事が行なわれましたが、今月十六十七日の両日、大正大学において第十四回浄土教学大会が開催されます。

大正大学も皆様方多数のご協力のもとに建築された新校舎が今月二日完成し、竣工式が盛大に行なわれました。ここに宗学および関係教学の一層の隆盛が期待されるところですが、この新校舎の柿落しとして教学大会が開かれる運びになっております。一般研究発表・浄土宗教学院助成研究発表のほか、シンポジウムでは「幼児の宗教教育について」と題し、各地の幼稚園での宗教情操教育の問題が討論される予定です。

「浄土」講読規定

一部 定価 金六十円

会費一カ年 金七二〇円

(送料 不要)

浄土 十一月号

昭和十年五月二日

第三機郵便物認可

昭和四十三年十月二十五日 印刷

昭和四十三年十一月一日 発行

定価 六十円

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二男

印刷所 新光社印刷株式会社

東京都千代田区新田橋一ノ十一ノ六

発行所 法然上人顕仰会

電話東京二六二局五九四四番

振替東京八二一八七番

東京都港区芝公園十九号地の一

浄土宗務支所内

編集室 法然上人顕仰会

宮林昭彦 著

「極楽に生きる」

宗祖のご生涯を通して、現代に生きる私達に
指針を与える好書

定価二六〇円 送料五〇円

御希望の方は弊会まで申込み下さい

四版 村瀬秀雄 著

浄土宗檀信のおつとめ

訓読・註解を付したわかりやすい経本

定価一〇〇円 送料五〇円

御希望の方は弊会まで申込み下さい

“御年始のご挨拶がわりに御用を,,

「浄土宝暦」 価 25円・送料 25円 40ページ

50部以上より単価22円 送料実費

「修養ひめくり」 価 100円・送料45円用紙33枚
タテ37cm・ヨコ13cm

会員のかたは単価85円 送料実費 (見本は150円お送り下さい)

発 所 法 然 上 人 讃 仰 会

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可
昭和四十三年十月二十五日印刷 昭和四十三年十一月一日発行

浄土

第三十四卷

第十一号

定価金六拾円(送料六円)